

崇徳院の『久安百首』について

—四季部と恋部を中心に—

On “Kyuan Hyakushu” by Sutokuin

Focusing on the part of the four seasons and the part of love

柏木 由夫¹

¹大妻女子大学文学部日本文学科

Yoshio Kashiwagi¹

¹Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：仏教，幻想的美，自己中心

Key words : Buddhism, Illusory beauty, Egocentrism

抄録

まず、崇徳院の『久安百首』春部末尾の独自性を指摘した。次に四季部を中心に彼の和歌の特徴的要素を“和歌の用語と手段”の面から3点，“和歌の方向性（心の在処）”の面から5点を指摘し、後者の要素は連環する崇徳院の心の世界を示すと考えた。次に恋部は、恋の進行に従った構成に、和漢の知識に拠る恋歌を添えたとした。一般的恋歌から外れた身勝手さや、強引き、あるいは卑屈さの裏にある孤独などが読み取れるとした。恋の進行の末尾歌を俊成が改訂した本文が『百人一首』に入ったとした。

1. はじめに

崇徳院の和歌への傾倒は、尋常ならざる出生を出発として『保元の乱』に至る不如意な実人生⁽¹⁾の反動とも慰めとも見なされる。その活動の大部分は身近での小規模なものが主だったが、『久安百首』と『詞花和歌集』の編纂は例外的に規模の大きな営為だった⁽²⁾。後者に入集している

瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあはんとぞ思ふ（恋上・二二九）

が『百人一首』に入れられたが、崇徳院の最も知られている一首だろう。後文で触れるように本文に異動はあるが、初め『久安百首』で詠まれたものである。このことは崇徳院にとっての本百首の重要性を象徴している⁽³⁾。しかし、『久安百首』について出されている多くの研究は、成立に関するものを始発としつつ、当代以後の歌壇を主導した藤原俊成と、その撰になる『千載集』への関心によるものが多い。

まず、特に崇徳院に触れている研究の若干を以下に示す。岡本あつ子氏は、『千載集』所収の崇徳

院による長歌、俊成による序文から窺える如く、両者は深い絆があったとし、『久安百首』は、形式的にも内容的にも、崇徳院と俊成の強い絆の結晶であるとされた⁽⁴⁾。佐藤明浩氏は、院政期に盛んに書かれた難語の注説が新たな作歌を生んだとされ、崇徳院については、六（いなむしろ）、四八（とよはた雲）について、そうした注説の知識に基づいて詠んだと述べられた⁽⁵⁾。野本瑠実氏は、崇徳院の羈旅歌では、具体的な地名は極力避けられていて、歌が連続することで、都を出て野を越え山を越え浜に辿り着いて、日も暮れたので旅寝するようになっており、通底するのは、「旅の辛苦」で、一つの主題で詠まれた五首は、崇徳院と俊成の羈旅歌以外には見られず、崇徳院には羈旅歌への高い関心がかがえるとされた⁽⁶⁾。この他に、佐藤明浩氏は、『部類本』と『千載集』の配列の面⁽⁷⁾、また竹下豊氏は、『堀河百首』の影響という面⁽⁸⁾、それぞれ崇徳院の百首にも言及している。

本稿では『久安百首』の主催者である崇徳院の和歌について、主として四季部と恋部の内容から

注目点を明らかにしたいが、その前に崇徳院が本百首成立についての思いを吐露した二カ所を示したい。

まず、「無常」題の第二首（九一）で、

はかなさは外にもいはじ百歌のその人数はた
らず成りにき⁹⁾

と、百首全体が成立する前に没した四名への思いをこめるが、次の左注を伴い、合わせて院の鎮魂の胸中を伺うことができる。

先年既ニ百首ノ人数ニ列シ、未ダ六儀ヲ終ラザル詞藻之輩、或暮齡ニ依リ、朝露ニ類シ、或紅顔ト雖ドモ、黄壤ニ帰ス、浮生眼驗シ、慨然トシテ涙ヲ攪シ、故ニ之ヲ詠ズ（暮齡…老齡〈紅顔〉と対立）、黄壤…黄泉、朝露・浮生…はかない人生、慨然…憤り嘆く、攪…みだす）

ここで、「紅顔」とあっても最若年の死没は藤原公行の四四歳だから表現面の脚色も推測されるが、「慨然トシテ涙ヲ攪シ」の表現には崇徳院らしい激しい悲しさも十分感じ取られる。

もう一つは、百首末に「短歌」として示される長歌である。

敷島や 大和の歌の つたはりを 聞けばは
るかに ……

と和歌史を古代に遡って当代への道筋を示し、

近きためしに^①堀川の 流れを汲みて さざ

なみの^②より来る人に あつらへて 拙なき
事は 浜千どり あとを末まで とどめじと
思ひながらも 津の国の 難波の浦の 何と
なく 船のさすがに 此事を 忍び習ひし

なごりにて 世の人ぎきは^③ 恥ずかしの も
りもやせんと 思へども 心にもあらず 書
き連ねつる

①『堀河百首』を継承して、②十三人に百首を命じた本百首成立の経緯を述べ、定型的な③謙遜の表現で閉じる。本百首についての院自身による位置づけを伺うことができる。

2. 『個人別』四季部の配列

『久安百首』は、継承した『堀河百首』のような部立内の歌題まで定めていない。部立に応じての内容は歌人に任せられている。それを俊成がつぶさに検して歌題別に分類し直したのが『部類本久安百首』¹⁰⁾であるが、最も詳細な部類が成されたのは四季部である。以下に『個人別久安百首』の四季部に、一四人の歌人がどのような内容を詠んでいるか、『部類本』の歌題によって整理した。

| 「春」 | 崇徳院 | 公能 | 教長 | 頭輔 | 季通 | 隆季 | 親隆 | 実清 | 頭広 | 清輔 | 堀川 | 兵衛 | 安芸 | 小大進 |
|-----|-----|----|----|----|------|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 1 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 | 立春 |
| 2 | 子日 | 若菜 | 早春 | 鶯 | 霞 | 立春 | 早春 | 早春 | 若菜 | 早春 | 早春 | 早春 | 梅 | 子日 |
| 3 | 若菜 | 鶯 | 鶯 | 霞 | 子日 | 子日 | 子日 | 子日 | 梅 | 霞 | 子日 | 鶯 | 若菜 | 霞 |
| 4 | 梅 | 梅 | 鶯 | 梅 | 若菜 | 子日 | 霞 | 若菜 | 鶯 | 鶯 | 霞 | 若菜 | 梅 | 鶯 |
| 5 | 梅 | 霞 | 早春 | 子日 | 梅 | 若菜 | 霞 | 若菜 | 早蕨 | 若菜 | 鶯 | 霞 | 鶯 | 若菜 |
| 6 | 柳 | 帰雁 | 子日 | 若菜 | 残雪 | 若菜 | 霞 | 鶯 | 帰雁 | 梅 | 鶯 | 残雪 | 梅 | 残雪 |
| 7 | 鶯 | 帰雁 | 若菜 | 残雪 | 柳 | 鶯 | 鶯 | 霞 | 春雨 | 梅 | 梅 | 梅 | 桜 | 梅 |
| 8 | 鶯 | 桜 | 梅 | 柳 | 鶯 | 鶯 | 鶯 | 梅 | 菫 | 梅 | 梅 | 柳 | 桜 | 柳 |
| 9 | 鶯 | 桜 | 梅 | 早蕨 | 春歌 | 霞 | 残雪 | 梅 | 桜 | 柳 | 帰雁 | 早蕨 | 桜 | 早蕨 |
| 10 | 桜 | 桜 | 柳 | 春雨 | 桜 | 霞 | 梅 | 柳 | 桜 | 柳 | 桜 | 帰雁 | 桜 | 桜 |
| 11 | 桜 | 桜 | 桜 | 春田 | 桜 | 柳 | 桜 | 柳 | 桜 | 春駒 | 桜 | 桜 | 桜 | 春雨 |
| 12 | 桜 | 桜 | 桜 | 帰雁 | 春歌 | 帰雁 | 桜 | 帰雁 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 呼子鳥 | 春駒 |
| 13 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 春田 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 躑躅 | 帰雁 |
| 14 | 藤 | 桜 | 桜 | 桜 | 帰雁 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 桜 | 残雪 | 呼子鳥 |
| 15 | 藤 | 桜 | 桜 | 桜 | (杜若) | 春雨 | 桜 | 桜 | 桜 | 春歌 | 桜 | 桜 | 山吹 | 春田 |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|-----|----|------|----|----|----|----|------|----|----|------|
| 16 | 躑躅 | 柳 | 桜 | 山吹 | 山吹 | 春雨 | 春駒 | 桜 | 桜 | 春歌 | 桜 | 桜 | 柳 | 三月三日 |
| 17 | 山吹 | 山吹 | 桜 | 躑躅 | 藤 | 三月三日 | 帰雁 | 桜 | 桜 | 躑躅 | 三月三日 | 董 | 桜 | 杜若 |
| 18 | 山吹 | 山吹 | 桜 | 呼子鳥 | 暮春 | 三月三日 | 春田 | 藤 | 桜 | 杜若 | 董 | 藤 | 春田 | 山吹 |
| 19 | 暮春 | 藤 | 躑躅 | 藤 | 暮春 | 春 | 藤 | 躑躅 | 春田 | 山吹 | 藤 | 山吹 | 暮春 | 藤 |
| 20 | 桜 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 | 暮春 |

春上 | 立春・早春・子日・若菜・鶯・霞・残雪・梅花・早蕨・柳・帰雁

春下 | 桜・春歌・春雨・春田・春駒・呼子鳥・三月三日・董・躑躅・山吹・杜若・藤花・暮春

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 「夏」 | 崇徳院 | 公能 | 教長 | 頭輔 | 季通 | 隆季 | 親隆 | 実清 | 頭広 | 清輔 | 堀川 | 兵衛 | 安芸 | 小大進 |
| 21 | 首夏 | 首夏 | 首夏 | 首夏 | 卯花 | 首夏 |
| 22 | 葵 | 葵 | 初夏 | 卯花 | 郭公 | 初夏 | 卯花 | 卯花 | 葵 | 卯花 | 郭公 | 葵 | 初夏 | 卯花 |
| 23 | 郭公 | 郭公 | 初夏 | 郭公 | 葵 |
| 24 | 郭公 | 郭公 | 卯花 | 水鶏 | 菖蒲 | 菖蒲 | 郭公 | 郭公 | 郭公 | 早苗 | 卯花 | 菖蒲 | 五月雨 | 郭公 |
| 25 | 菖蒲 | 郭公 | 牡丹 | 花橘 | 花橘 | 五日 | 郭公 | 早苗 | 郭公 | 五月雨 | 菖蒲 | 五月雨 | 五月雨 | 菖蒲 |
| 26 | 花橘 | 郭公 | 菖蒲 | 蛭 | 蛭 | 花橘 | 菖蒲 | 五月雨 | 花橘 | 照射 | 五月雨 | 水鶏 | 花橘 | 五月雨 |
| 27 | 照射 | 郭公 | 郭公 | 菖蒲 | 夏歌 | 花橘 | 五月雨 | 照射 | 五月雨 | 夏歌 | 五月雨 | 早苗 | 夏歌 | 花橘 |
| 28 | 鶺鴒川 | 卯花 | 郭公 | 五月雨 | 泉水 | 郭公 | 夏歌 | 氷室 | 常夏 | 夏歌 | 夏夜月 | 夏夜月 | 夏歌 | 蓮 |
| 29 | 夏夜月 | 菖蒲 | 郭公 | 夏暮 | 夏暮 | 六月祓 | 水鶏 | 常夏 | 蓮 | 夏夜月 | 蓮 | 泉水 | 夏暮 | 泉水 |
| 30 | 六月祓 | 氷室 | 夏暮 | 六月祓 | 六月祓 | 六月祓 | 六月祓 | 蓮 | 六月祓 | 六月祓 | 六月祓 | 夏暮 | 六月祓 | 六月祓 |

夏 | 首夏・初夏・卯花・葵・牡丹・郭公・菖蒲・五日・五月雨・花橘・早苗・郭公・水鶏・蛭・照射・夏歌・常夏・鶺鴒川・蓮・夏夜月・氷室・泉水・夏暮・六月祓

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 「秋」 | 崇徳院 | 公能 | 教長 | 頭輔 | 季通 | 隆季 | 親隆 | 実清 | 頭広 | 清輔 | 堀川 | 兵衛 | 安芸 | 小大進 |
| 31 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 | 立秋 |
| 32 | 七夕 | 七夕 | 七夕 | 霧 | *七夕 | 立秋 | 七夕 | 早秋 | 萩 | 七夕 | 七夕 | 七夕 | 七夕 | 七夕 |
| 33 | 七夕 | 月 | 七夕 | 露 | 秋歌 | 七夕 | 女郎花 | 七夕 | 七夕 | 女郎花 | 七夕 | 萩 | 早秋 | 萩 |
| 34 | 萩 | 月 | 鹿 | 七夕 | 露 | 七夕 | 萩 | 萩 | 早秋 | 女郎花 | 萩 | 女郎花 | 鹿 | 女郎花 |
| 35 | 女郎花 | 月 | 虫 | 七夕 | 秋歌 | 萩 | 萩 | 露 | 秋歌 | 萩 | 女郎花 | 萩 | 女郎花 | 薄 |
| 36 | 蘭 | 月 | 初雁 | 鹿 | 秋歌 | 女郎花 | +薄 | 女郎花 | 萩 | 霧 | 露 | 露 | 萩 | 刈萱 |
| 37 | 鹿 | 月 | 月 | 月 | 秋歌 | 秋歌 | 初雁 | 蘭 | 虫 | 秋歌 | 刈萱 | 薄 | 蘭 | 蘭 |
| 38 | 初雁 | 月 | 月 | 月 | 虫 | 月 | 鹿 | 虫 | 秋歌 | 露 | 駒迎 | 虫 | 刈萱 | 萩 |
| 39 | 月 | 月 | 月 | 月 | 女郎花 | 駒迎 | 露 | 鹿 | 月 | 鹿 | 初雁 | 虫 | 薄 | 初雁 |
| 40 | 月 | 月 | 月 | 萩 | 萩 | 初雁 | 月 | 萩 | 月 | 霧 | 鹿 | 霧 | 薄 | 鹿 |
| 41 | 月 | 紅葉 | 月 | 女郎花 | 薄 | 菊 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 虫 | 露 |
| 42 | 月 | 菊 | 月 | 薄 | 秋田 | 初雁 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 十三夜 | 霧 |
| 43 | 月 | 薄 | 月 | 蘭 | 紅葉 | 霧 | 月 | 月 | 月 | 秋歌 | 月 | 月 | (月) | 朝顔 |
| 44 | 月 | 薄 | 萩 | 秋田 | 九月尽 | 鹿 | 月 | 十三夜 | 月 | 秋歌 | 月 | 朝顔 | 紅葉 | 駒迎 |
| 45 | 月 | 萩 | 女郎花 | 初雁 | 月 | 鹿 | 擣衣 | 擣衣 | 月 | 虫 | 月 | 鹿 | 九月尽 | 月 |
| 46 | 菊 | 鹿 | 蘭 | 擣衣 | 鹿 | 虫 | 虫 | 菊 | 月 | 菊 | 十三夜 | 秋田 | 萩 | 擣衣 |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|
| 47 | 菊 | 女郎花 | 菊 | 駒迎 | 秋歌 | 虫 | 駒迎 | 秋歌 | 月 | 紅葉 | 月 | 菊 | 薄 | 虫 |
| 48 | 紅葉 | 虫 | 紅葉 | 鹿 | 秋田 | 菊 | 紅葉 | 紅葉 | 擣衣 | 紅葉 | 虫 | 月 | 初雁 | 菊 |
| 49 | 紅葉 | 虫 | 紅葉 | 紅葉 | 秋歌 | 九月尽 | 霧 | 紅葉 | 菊 | 紅葉 | 紅葉 | 紅葉 | 虫 | 紅葉 |
| 50 | 九月尽 | 九月尽 | 九月尽 | 九月尽 | 秋歌 | 九月尽 | ◇九月尽 | 九月尽 | 九月尽 | 九月尽 | 九月尽 | 九月尽 | 虫 | 九月尽 |

*部類本欠 +個人別「女郎花」 ◇個人別と部類本が別歌

秋上 | 立秋・早秋・七夕・萩・女郎花・萩・蘭・薄・刈萱・秋歌・月

秋下 | 駒迎・初雁・露・霧・朝顔・鹿・秋田・虫・菊・擣衣・十三夜・月歌・秋歌・紅葉・九月尽

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|-----|
| 「冬」 | 崇徳院 | 公能 | 教長 | 頭輔 | 季通 | 隆季 | 親隆 | 実清 | 頭広 | 清輔 | 堀川 | 兵衛 | 安芸 | 小大進 |
| 51 | 初冬 | 初冬 | 初冬 | 初冬 | 時雨 | 初冬 | 初冬 | 時雨 | 初冬 | 初冬 | 初冬 | 初冬 | 初冬 | 初冬 |
| 52 | 時雨 | 初冬 | 時雨 | 落葉 | 冬歌 | 初冬 | 落葉 | 落葉 | 落葉 | 霜 | 落葉 | 時雨 | 炭窯 | 時雨 |
| 53 | 氷 | 時雨 | 雪 | 時雨 | 氷 | 落葉 | 時雨 | 冬歌 | 霜 | 冬歌 | 時雨 | 霜 | 霰 | 霰 |
| 54 | 水鳥 | 冬歌 | 雪 | 霜 | 冬歌 | 落葉 | 雪 | 氷 | 千鳥 | 霰 | 水鳥 | 霰 | 神楽 | 雪 |
| 55 | 千鳥 | 雪 | 雪 | 雪 | 雪 | 霜 | 雪 | 氷 | 霰 | 雪 | 雪 | 雪 | 氷 | 千鳥 |
| 56 | 霰 | 雪 | 霰 | 炭窯 | 水鳥 | 霜 | 雪 | 水鳥 | 雪 | 雪 | 雪 | 雪 | 冬歌 | 氷 |
| 57 | 雪 | 霜 | 氷 | 霰 | 冬歌 | 雪 | 氷 | 千鳥 | 雪 | 雪 | (雪) | 千鳥 | 霰 | 神楽 |
| 58 | 雪 | 千鳥 | 水鳥 | 水鳥 | 炭窯 | 雪 | 炭窯 | 雪 | 雪 | 氷 | 神楽 | 氷 | 水鳥 | 炭窯 |
| 59 | 雪 | 水鳥 | 千鳥 | 千鳥 | 冬歌 | 歳暮 | 埋火 | 雪 | 炭窯 | 炭窯 | 歳暮 | 炭窯 | 冬歌 | 雪 |
| 60 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 | 歳暮 |

冬 | 初冬・時雨・落葉・霜・冬歌・霰・氷・水鳥・千鳥・雪・冬歌・神楽・炭窯・埋火・冬歌・歳暮

表中の括弧は『個人別』で歌が欠けている場合を表し、各季の表後に『部類本』での四季部の配列を示した。また、表中太字は『部類本』での歌題冒頭歌を表す。主催者である崇徳院歌の多くが該当するが、郭公・七夕・萩・紅葉は例外で、歌の内容も関係すると思われる。

全体を通して見ると、各季節での歌題には多寡があって、春は桜、夏は時鳥（郭公）、秋は月、冬は雪が重んじられていることが明瞭で、それは崇徳院も例外ではない。ここで崇徳院に注目すると、春部末尾歌（二〇）が、他のすべての歌人が「暮春」とする中で、院のみが「桜」を詠む、

朝夕に花まつ比は思ひ寝の夢のうちにぞ咲きはじめける（千載集・春上・四一）

であることに注意される。この歌が『部類本』と『千載集』で桜歌群の冒頭に位置することは、前掲の佐藤氏の論文に指摘がある⁴¹。これから咲く花を待つ内容の和歌だから、『部類本』の判断が当然で、『個人別』は何かの誤りか、独自の判断からの意図的なものと推測される。ここは、

前歌（一九）に「暮春」を配した上でのことと考えると、時の流れに従うという定型の枠を越えて桜を春の代表として位置づけた、崇徳院の独自の意図的配列と考えたい。

3—（1）和歌の用語と手段

次に崇徳院の『久安百首』の表現からの注目点について述べたい。しかし、和歌内容は前提となる部立によってある程度限定されている。例えば釈教などでは経典に依拠するという固い枠組みの中で詠まれる。ここでは、そうした枠組みが比較的ゆるいと思われる四季部の和歌を中心に検討を加えた。

まず、「和歌の用語と手段」という観点からの注目点としては、以下の三点を指摘できる。

- A. 三代集的詠法
- B. 漢詩句を本にする
- C. 古代語の多用

それぞれについて三首を例に挙げる。まず、「A. 三代集的詠法」という面から次の①～③を

例とし、併せて類歌とおぼしい和歌を添えた。

- ① ことならばさてこそ散らめ桜花をしまぬ人も
あらじと思へば(春・一二, 続後撰集・春下・
一二〇)
...ことならばさかずやはあらぬさくら花見る
我さへにしづ心なし(古今集・春下・八二・
貫之)
- ② 山吹の花のゆかりにあやなくも井手の里人む
つましきかな(同・一七, 新後撰集・春下・
一四五)
...山吹の花のさかりにみでにきてこのさと人
になりぬべきかな(拾遺集・春・六九・恵
慶)
- ③ 木枯にもみぢ散りぬる山回り何を時雨のそめ
んとすらむ(冬・五二, 続後拾遺集・冬・四
一九)
...君がさす三笠の山のもみぢばのいろ神な月
しぐれのあめのそめるなりけり(古今集・
雑体・一〇一〇・貫之)
もろともに山めぐりするしぐれかなふるに
かひなき世とはしらずや(玄々集・一五三・
道雅)

①での擬人的用法, ②での歌枕, ③での時雨が
紅葉を染めるという和歌の用法は, 三代集時代の
典型的な技法である。

「B. 漢詩句を本にする」という面の例として
は, 次の④~⑥が挙げられる。

- ④ 花は根に鳥は古巢に帰るなり春のとまりをし
る人ぞなき(春・一九, 千載集・春下・一二
二)
- ⑤ 雁がねのかき連ねたる玉章をたえだえに消つ
今朝の朝霧(秋・三八, 新後拾遺集・秋上・
三三三)
- ⑥ 玉寄する浦わの風に空晴れて光をかはす秋の
夜の月(同・四二, 千載集・秋上・二八二)

④は、『和漢朗詠集』所収「...花ハ根ニ帰ラムコ
トヲ悔ユレドモ... 鳥ハ谷ニ入ラムコトヲ期スレ
ドモ ...」(春・六一・藤滋藤)との漢詩句に基づ
き, ⑤は、『漢書』「蘇武伝」にある「雁帛」(雁信)
の故事に拠るもので, ⑥は、『後漢書』「孟嘗伝」
にある「合浦珠還」の故事に拠るものである。

「C. 古代語の多用」という面の例としては,
次の⑦~⑨が挙げられる。それぞれ基づく古代文
献例を付した。

- ⑦ 嵐吹く岸の柳のいなむしろをりしく波にまか
せてぞみる(春・六, 新古今集・春上・七一)

いなむしろ かはそひやなぎ みづゆけば
...伊難武斯盧 智簸泝比野難擬 寐逗愈凱磨

なびきおきたち そのねはうせず
難弭企於己陀智 曾能泥播宇世儒(日本書
紀・卷十五・八三・顯宗天皇)

- ⑧ 五月山弓末ふりたて灯す火に鹿や ^(はか)あや ^ひな
く目をあはすらん(夏・二七, 新拾遺集・夏・
二七四)

マサラヲノ ユヅエフリタテ イツルヤヲ
... 大夫之 弓上振起 射都流矢乎

ノチミムヒトハ カタリツクガネ
後将見人者 語 継 金(万葉集・卷 三・
三六七[新番号]・三六四[旧番号]〈西本願
寺本訓〉)

- ⑨ 雲の波天の川瀬にたたねどもなに現れて澄め
る月かな(秋・四三)

アメノウミニ クモノナミタチ ツキノフネ
... 天海舟 雲之波立 月船

ホシノハヤシニ コギカクルミノ
星之林舟 榜隠所見(万葉集・卷七・
一〇七二・一〇六八)

ヒサカタノ アマノカハセニ フネウケテ
久方之 漢瀬 尔 船泛而

コヨヒカキミガ ワガリキマサム
今夜可君之 我許来益武(万葉集・卷
八・一五二三・一五一九)

⑦での古代語とは、「いなむしろ」で、すでに佐
藤氏の論文⁴³でも引かれるように、『俊頼髓脳』で、
河のつらに生ひたる柳の枝の、水にひたりて
流るるが、また、「いなむしろ」に似たるなり
との注釈も成されている。⑧は、「ゆづゑふりたて」
で、この箇所は『万葉集』の伝本によっていくつ
かの異なる訓があるが⁴⁴、『古今六帖』が一致する
ので平安時代に用いられていた訓みと判断される。
⑨は「くものなみ」と「あまのかはせ」だが、こ
れも『万葉集』から見られる語である。

3—(2) 和歌の方向性(心の在処)

次に、「和歌の方向性(心の在処)」という観点
からの注目点として、以下の五点が指摘できる。

- D. 日常性(語)・俗世への関心
E. 視覚美

F. 幻想美への嗜好

G. 殺生戒・罪

H. 仏教帰依

まず、「D. 日常性（語）・俗世への関心」という面から次の⑩～⑫を例とし、併せて類歌とおぼしい和歌を添えた。

⑩ 鶯のなくべき程に成りゆけばさもあらぬ鳥も耳にこそたて（春・七）

…なづさはし花橋の移り香はさもあらぬ人の名も立ちぬべし（堀河百首・廬橋・四五・国信）

⑪ 春ごとにたかきに移る鶯や位の山のありすなるらん（同・八）

…くらゐ山たかくあふげば万代の雲のうへにぞみえのぼるかな（赤染衛門集・三九三）

⑫ 星とのみ紛へる菊の薫るかは空だき物の心ちこそすれ（秋・四六）

…久方の雲のうへにて見る菊はあまつほしとぞあやまたれける（古今集・秋下・二六九・敏行）
行きぶりに梅がかきねに立ちよりにてそらだき物をみにしたるかな（源賢法眼集・四）

⑩では、日常生活に用いられる「さもあらぬ」が用いられ、⑪では、世俗的な身分への関心が示される。⑫は、菊を星と見立てる『古今集』以来の技法とともに、日常の生活空間そのものを表す「空だき物」が詠まれている。

次いで、「E. 視覚美」を示すものとして、同じように三首を挙げる。

⑬ 紫陽花のよひらの^{〔やへ〕}山にみえつるは葉ごし

の月の影にや有るらん（夏・二九）

…あぢさゐの花のよひらに漏る月を影もさながらをる身ともがな（散木奇歌集・三二〇）

⑭ 月清みゆるぎの杜にゐる鶯のたたずはよそにいかでわかまし（秋・四一）

…雪ふればゆるぎの杜の枝わかずよるひる鶯のゐるかとぞおもふ（好忠集・三五二）

⑮ 晴れぬれど枝もとををにしづりしを木の下かげは猶雪ぞふる（同・五九）

…あさまだき松のうはばの雪はみんなひかげさしこばしづれもぞする（為忠家初度百

首・冬・四七七・仲正）長承三年（1134）末頃には成立。

⑬は、月光に照らされた紫陽花を詠む点で『散木奇歌集』詠と重なるが、なお叙景に徹し具体的になっている。⑭は、好忠詠に倣いつつ白鷺を詠むが、白雪を月の光に変え、白の重なりだけでなく動きを加えている。⑮で「しづり」とあるのは、木の枝に積もった雪が滑り落ちることをいうが、空は晴れ地上は雪が降っていると、視界による天候の差を詠んでいる。

次は、「F. 幻想美への嗜好」の例三首である。

⑯ 山たかみ岩根のさくらちる時は天の羽衣なづるとぞみる（春・一一、新古今集・春下・一三一）

…君が世は天の羽衣まれにきてなづともつきぬ巖ならなん（拾遺集・賀・二九九・読人しらず）

⑰ 朝夕に花まつ比は思ひ寝の夢のうちにぞ咲きはじめける（同・二〇、千載集・春上・四一）

…やどりして春の山辺にねたる夜は夢の内にも花ぞちりける（古今集・春下・一一七・貫之）

⑱ 時鳥なきつる杜の一枝はあかぬなごりのかたみなりけり（夏・二三）

…ほととぎすはつねは空にとまらねどあかぬなごりにながめつるかな（散木奇歌集・二一六）

⑯は、『拾遺集』に類歌があり、それは仏説に拠るとの注釈が『奥義抄』にある。すなわち、経云、方四十里の石を三年に一度梵天よりくだりて、三銖の衣にて撫に尽を一劫と為す。うすくかろき衣なり。このころをよめるなり。

とあり、「三銖の衣」が「天の羽衣」に当たる。こうした知識を基にして、落花に天人の振る舞いを想像した幻想的な情景を詠んでいるのだと思われる。⑰は、貫之詠に近い内容だが、現実に得られないことを夢で見ている点で異なり、夢そのものへの期待の大きさが知られる。前述したように、この詠は春部の末尾に配されることで重んじられていた一首だと推測される。⑱は、一声鳴いて飛び去った時鳥への愛着を詠むが、「なごり」のみでしかない「杜の一枝」に去った時鳥を見続けている点で現実にはないことにこだわり続ける面がよく表れていると言えるだろう。

次は方向を変えて、精神的世界に関わる、「G. 殺生戒・罪」への意識が窺える例として①⑨～②①を見る。

①⑨ 早瀬川みを遡る鵜飼ひ舟まづこのよにもいかがくるしき(夏・二八, 千載集・夏・二〇五)
...大井河う舟にともす篝火のかかる世にあふ
鮎ぞはかなき(永久百首・鵜河・一八九・大進)

②① 情けなき狩子の耳にさを鹿の今宵の声をいかで聞かせん(秋・三七)
...ことわりやかでか鹿のなかざらんこよひばかりの命と思へば(後拾遺集・雑三・九九・和泉式部)

②① 罪しれる人やすむらん川瀬には築きりすてて網の目もみず(物名・にはやなぎ・九八)

... 備前国に、小島と申す島にわたりたりけるに、あみと申す物とする所は、おのおのわれわれしめて、長き棹に袋をつけて、たてわたすなり、その棹のたてはじめをば、一の棹とぞなづけたる、なかに年高きあま人のたてそむるなり、たつるとて申すなる言葉きき侍りしこそ、涙こぼれて、申すばかりなくおぼえて、よみける

たてそむるあみとるうらの初棹はつみのなかにもすぐれたるかな(山家集・一三七二)

まず①⑨は、川を遡る鵜飼を詠むが、入集している『千載集』の注(新日本古典文学大系)で、

来世での殺生の報いに苦しむのに先立って、まず現世でもどれほどか苦しいことだろう。

と示されているように、鮎を捕獲し殺生する鵜飼の生業は罪深く、死後の責め苦が約束されるとされる。②①は、鹿狩りを非情なものとして、命を絶たれる鹿の悲しげな声を詠む。②①は、「物名」という「ことば遊び」の技量を示す和歌だが、内容は築漁を罪深いこととしつつ、獲物を逃がす人物を詠んでいる。「あみ」が小エビに似た「蟹」の掛詞とも解されるので、「蟹」を詠む西行の一首を添えたが、漁を罪とする両者の意識は通じ合うものがあるだろう。

最後は、精神的世界の根本とも言える「H. 仏教帰依」の意識を底に持つと思われる例として、②②～②④を挙げる。

②② くらぶ山木の下陰の岩つつじただこれのみや光なるらむ(春・一六, 新後拾遺集・春下・

一四一)

... 知恵光仏

わび人の心のうちをよそながらしるやさとの光なるらん(散木奇歌集・八九一)

②③ ひたすらに厭ひもはてじかばかりの月を保てる此世なりけり(秋・四四)

...いかにして法をたもたむよにふれば眠もさめぬ夢の悲しさ(発心和歌集・一三)

②④ 松がねの枕もなにかあだならむ玉の床とて常の床とは(羈旅・九七)

... しろみねと申しける所に、御はかの侍りけるにまゐりて

よしやきみむかしのたまのゆかとてもかからん後は何にかはせん(山家集・一三五五)

②②は、暗がりの中で唯一光かがやく岩躑躅を詠むが、この第五句は仏教詠のみに用いられる語句である。②③は、厭うこの世の中で月のみに救いを求めるとの内容だが、用いられている「保つ」は仏教詠に特有な語である。②④は、「羈旅」の詠で、松の根を枕とする旅寝だけが侘しく頼りないのではなく、金殿玉楼での生活も永遠などあり得ないと、在位時代の栄華を漂泊に重ねて、仏教的無常観を示している。ここにも西行の詠を添えたが、讃岐の崇徳院白峰陵に詣でた折のもので、「玉の床」の虚しさ感慨を込めているのは、院の②④を意識しているとも考え得る。

以上、崇徳院の『久安百首』で四季部中心に注目点を大きく2つに分け、A～Cで“用語と手段”、D～Hで“和歌の方向性(心の在処)”として述べてきた。このA～Hは、『後拾遺集』～『千載集』という平安後期の和歌全般について指摘されることでもある。その点で言えば、崇徳院の和歌には当時の時代性が素直に反映していると確認できるということになるだろう。しかし、特にD以下については、個々の特色が単に時代に合わせたものとして羅列的に共存しているというのではなく、全体として連続した崇徳院の心の世界を示すものと考えたい。俗世への関心が現実世界を丁寧に見て写し取ろうとする視覚美への方向性を生むが、現実直視の目は、人間世界の罪深さをも見つめさせる。その先に視覚美から非現実の幻想美へ向かう道と、なお人間と世界の根本と救いを見続け求めようとする仏教への道が開けているのではないだろうか。しかも、幻想美を示すとしたFの②⑥は、山の岩根

への落花を描くが、それは仏説に拠るものであり、仏教帰依を示すとしたHの②で注目された岩躑躅は格別美しい輝きとされていて、別れた道筋は、実は連環する世界になっているかのように思われる¹⁵⁾。

4—(1)「不会恋」

以下では、崇徳院の『久安百首』恋部について見てゆく。恋部は、六一～八〇までの20首から成る。まず全体の構成を確認する。

- (1) 六一～七三.....「不会恋」 13首
 - (2) 七四・七五.....「後朝恋」 2首
 - (3) 七六「会不会恋」 1首
 - (4) 七七～八〇...和漢の知識に拠る恋歌 4首
- 『部類本久安百首』は、四季部のような細かな題は示していないので、『個人別』の一首ごとの内容から判断した。おおまかに、(1)～(3)が恋の進行に従った構成で、言わば第一部に当たり、(4)のみが別の第二部と見る。

まず、恋部冒頭の第一部について見てゆくが、「不会恋」とした前掲の(1)六一～七三の13首について、新たな通し番号を付けて簡単な解釈とともに示す。

- ① 武蔵鏡ふみだにも^(みせ)みぬものゆゑに何に心をか
け始め^(むら)けむ(六一, 新千載集・恋一・一〇
一五) ...恋の初め, 自問自答.
- ② おろかにぞ言の葉ならば成りぬべきいはで
や君に袖^(袖に君を)をみせまし(六二, 新勅撰集・恋
二・七五〇) ...言葉でなく, 片思いの涙を見
せたい.
- ③ 床の上にたえず涙は漲れど阿武隈川となら
ばこそあらめ(六三)
...みなぎる涙が逢瀬を導いてほしい.
- ④ さきの世の契りありけん^(いは)とばかりも身をかへ
てこそ人に知られめ(六四, 新勅撰集・恋二・
七五一)
...前世の縁と, 来世で会って知られたい.
- ⑤ 紅に涙の色はふかけれどあさましきまで人の
つれなき(六五)
...自分の紅涙は深いが相手の心は浅い.
- ⑥ 哀てふなげの情けもかかちなばそをだに袖の

乾くまにせむ(六六, 続千載集・恋二・一一
五〇)

...うわべだけの優しさでも涙を乾かしたい.

- ⑦ 命にはかへてあひみんと思へどもなれて別れ
は惜しからじやは(六七)
...命がけでも会いたいが, 会ったら慣れて別
れが楽にはなるということはない.
 - ⑧ いかでいかで嘆きをつみし報いとてあひみて
後に人をわび^(すれ)しむ(六八)
...私が辛かった報いに, 会った後相手を悲し
ませたい.
 - ⑨ はし鷹のそらしもはずひきすゑて仮初にだ
に逢ひみてしかな(六九)
...相手を逃がさず傍に置いて, 仮にでも会
いたい.
 - ⑩ 我妹子が思ひさくるに従はで恋はかみなき物
にぞありける(七〇)
...彼女の思いを神が裂くことには従わない.
恋には神はいないのだ.
 - ⑪ 根は深く思ひそめてき奥山の岩本菅のすげは
なけれど(七一)
...心に深く思い始めた. 表向きはそっけない
が.
 - ⑫ 君を^(欠)だにも人づてならでおとしめば我が身
の咎も嬉しからまし(七二)
...あなただけでも人を介さず私を非難するな
ら, 私自身が起こした過ちも嬉しいだろう.
 - ⑬ こひこひて頼むるけふのくれはどりあやにく
に待つほどぞ久しき(七三, 新勅撰集・恋三・
七八五)
...恋い続けてあてにさせた今日の夕暮だが,
心外にも待つときが長い.
- これらについて、冒頭の①や②などは、恋歌の
始まりとして、ほぼ常套的な内容と判断される。
この2首は共に勅撰集に入集しているが、他に
④⑥⑬も勅撰集に入集している。この中では、④
が現在の悲恋(片恋)を来世で解消しようという、
やや突飛な発想と感ずる。これに関わる和歌かと
思われるものに、
あふことは身をかへとも待つべきを世々を
隔てんほどぞかなしき(千載集・恋四・八九
七・俊成)
がある。出典は、『久安百首』成立の久安六年(1150)

より後の、承安三年（1173）から治承三年（1179）成立とされる『右大臣兼実歌合』である。④は二人ともに来世で会うことを期待するが、俊成歌は自分だけが生まれ変わったら、相手と違う世になってしまって悲しい、という④への反論とも見られる内容で、④からの刺激で作られたものかと推測したい。④が勅撰集に入ったのも、そのユニークさが魅力ありと評価されたと考える。いずれにせよ、勅撰集に入れられたことは、その内容に恋歌として一定の現実味があると評価されたことを表すのだろう。逆に言えば、勅撰集に漏れた和歌は、恋歌として適切さに欠けるとの評価を受けたものも含むということになる。以下で、そうしたもののなかから見てゆく。

まず、⑦で下句での、恋人に「慣れて」も「別れは惜し」とは、似た例として崇徳院以後では、
なれてのち死なん別のかなしきに命にかへぬ
あふこともがな（千載集・恋二・七二五・道因法師）

のようにあるが、院以前の和歌では見られない着眼点だと思われる。次に⑧は、末句「人をわびしむ」に恋歌らしからぬ違和感がある。木船重昭氏は、『部類本』本文を用いて、それを反語と解して「その女人を忘れられようか。逢い契れば、さらに情が深まって、とうてい忘れられはしない」と現代語訳を示している¹⁶。確かに、その方が和歌の内容としては穏やかになる。同じように『個人別』歌末の「わびしむ」を反語とも解し得るが、「いかでいかで」に依じる用法としては、強い意志を表すと考えるべきだろう。いわば、自分の満たされない恋心の捌け口を相手に求める、自己中心的で身勝手な主張と評されてもやむをえないだろう。こうした歌い方は、⑨でいっそう強調される。⑨は鷹狩に関わる語を続けて、恋心の格別な強さを表現したが、二・三句は恋歌としては不適切な強引きだと言わざるをえない¹⁷。

きわめてユニークと言うべき恋歌の連鎖だが、その先に位置するのか、解釈面で疑問を禁じ得ないのが⑩と⑫である。⑩で、「思ひさくる」は、「思ひ探る」「思ひ下ぐる」などもあり得るが、「思ひ裂くる」と考え、初・二句を「我妹子の恋心を神が裂く」と解した。それは、次の和歌に基づくと考えたためである。

天の原ふみとどろかし鳴る神も思ふなかをば
さくるものかは（古今・恋四・七〇一・読人

不知）

神も恋仲を裂くことはできず、人の恋心は屈しないとの主張で、「恋はかみなき」を「恋には裂く神がない」と解した。しかし、一方、次のような和歌もある。

^{あめつち}天地の かみなきものに あらばこそ あが
もふ妹に 会はず死にせめ（万葉集・巻一五・三七六二・三七四〇）

「天地の神がいまさぬものであったとしたら諦めてわたしの思う人に逢わずに死ぬのう」（新編日本古典文学全集『万葉集』の現代語訳）

ここでの神は、恋の成就を保証するもので、⑩とは整合しない。結局、⑩の解釈については疑問を残す。

⑫については、一首の意図が容易に理解しづらい¹⁸。まず、「人づてならで」の例では、

いまはただおもひたえなんとばかりを人づて
ならでいふよしもがな（後拾遺集・恋三・七五〇・道雅）

よそながらあはれといはむことよりも人づて
ならでいとへとぞおもふ（詞花集・恋上・一九六・成通）

などがあるが、後者の「いとへ」が⑫の「おとしめ」に通じるかと思われる。なお、⑫に近いと思われるのは、

あやしきもうれしかりけりおとしむるそのこと
のはにかかると思へば（散木奇歌集・一一八六）

で、我が身の卑しきを見下しても、関心を持ち言葉をかけられるなら卑しさも嬉しいとの内容と思われる。これに従い、⑫を丁寧に現代語訳するなら、

あなただけでも人を介さず私を非難するなら、私自身の過ちも嬉しいだろう。しかし、実際はあなたを含めて誰も私を批判などしない。

となる。しかし、これは恋歌の範囲を越えた、なお大きな孤絶的な状況を推測させるものと言えよう。⑫については、恋歌としての適切性に疑問を抱かざるを得ないのである。

4—(2)「後朝恋」「会不会恋」

次に(2)七四・七五の2首と、(3)七六を示す。
和田つ海の思ひし深き塩あひは今朝たちかへ

る涙なりけり (七四)

唐衣かさねし夜半の手枕につきけるしわを形見にぞみる (七五)

ゆき悩み岩にせかるる谷川のわれて末にもあはんとぞ思ふ (七六)

(2) の2首は、「今朝たちかへる」「唐衣かさねし夜半」の表現から、後朝の和歌と見られる。特に後者の、衣を重ねた夜更けの腕枕についての皺を形見に見るとある「しわ」については、四季部中心で指摘した「D. 日常性(語)・俗世への関心」の一例だが、それを恋歌でこのように詠むことはきわめてユニークな表現と言える。

そして、第一部の末尾(3)は、内容類型としては、「会不会恋」だが、この七六こそが、後に『百人一首』で選ばれた一首であり、第一部の到達点となっていると見られる。崇徳院で唯一の『久安百首』からの『詞花集』入集歌で、『百人一首』に選ばれたのも、『久安百首』内での位置づけが無縁ではないと考える。他に『後葉集』(谷川)『時代不同歌合』『百人秀歌』『古来風体抄』『詠歌大概』『定家八代抄』『定家十体』(われてすゑにも)に入る崇徳院の代表歌である。

本文は、『部類本』・『詞花集』・『百人一首』他のほとんどで、「瀬をはやみ～滝川のわれても末に」となっているが、『個人別久安百首』との違いについて、初句に絞って考えたい。まず、広く用いられている「瀬をはやみ」については、『万葉集』以来例の多い歌語で、恋歌では恋心の激しい情熱の比喩として用いられている。

思ふ人にえあひ侍らで、わすられにければ

せきもあへず涙の河のせをはやみかからん物と思ひやはせし(後撰集・恋六・一〇五八)

題しらず

せをはやみたえずながるる水よりもたえせぬ物はこひにぞ有りける(同・同・一〇五九)

一方、「ゆき悩み」は、障害があつて進めず困っている状態を表し、恋が思いに任せない状況であることを象徴する表現と言える。平安時代での類例は他に次の一例のみである。

こほりとち石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながるる(源氏物語・三一八・朝顔・紫の上)

この二つの表現について、『個人別』の恋部を冒頭から辿って、末尾4首を別とした末に位置するも

のとして見た時、そこに至るまでの、一般的恋歌から外れた身勝手さや、強引さ、あるいは卑屈さの裏にある孤独などに強く印象付けられたことを、逆に作者の心の内側に立って言えば、恋のみに限定されない生き難さの苦しみを吐露した表現として、「ゆき悩み」こそが自然であるように思う。「瀬をはやみ」については、推測でしかないが、俊成が『部類本』の編纂に当たって、『久安百首』全体について和歌表現を洗練化する中で、改訂案として示したものの一つで、それに崇徳院自身も、『詞花集』入集の時を含めて従ったのだらうと思うのである。

4—(3) 和漢の知識に拠る恋歌

最後に、第二部とした(4)の和歌を示し説明する。

ひれふりし松浦の山の乙女子もいと我ばかり思ひけむかも(七七)

わが恋は斧の柄くちし人なれやあはで七世も過ぎぬべきかな(七八)

恋ひ死なば鳥とも(〔欠〕)なりて君(〔は〕)がすむ宿の梢にねぐらさだめむ(七九)

嘆くまに鏡のかけも衰へぬ契りし事のかはるのみかは(八〇)

以下がそれぞれの内容の要約である。

大伴佐提比古に領巾を振った松浦の山の佐用姫も、私が思うほどに思ったのだらうなあ。

(七七)

私の恋は、斧の柄が朽ちた王質か。恋人に会わないで、七代もの期間が過ぎてしまったよ。

(七八)

恋に苦しみ死んだら鳥にでもなって、あなたが住んでいる家にある木の梢に寝所を決めよう。(七九)

悲恋を嘆く間に、鏡に映る容貌も萎れてしまった。単に恋の約束が変わっただけではない。

(八〇)

これらは、和漢の知識を用いて、恋人に会えず年月を経る悲しみを詠む和歌を配したものである。

すなわち、七七は、松浦佐用媛が任那へ遠征する際に立ち寄った大伴狭手(佐提)彦と恋に落ち、見送る時に佐賀県唐津市鏡山で褶{ひれ}を振った(男の魂を招き寄せる呪的な所作)という伝説に拠る。

大伴佐提比古郎子，特被_{ひとり}朝命_{うけたまはる}，奉_二

使藩国_{ふなよそひしてここにゆき}。 艤棹言_{やくやくに} 歸，稍赴_二蒼波_一。

妾也松浦佐用嬪面，嗟_二此別易_一，歎_二彼会難_一。 即_二登高山之嶺_一，遥望_二離去之船_一，

悵然断_レ肝，黯然銷_レ魂。 遂脱_二領巾_一 磨_レ之，

傍者莫_レ不_レ流_レ涕。 因_{なづけて}号_二此山_一，曰_二

領巾磨_レ之嶺_一也。 乃作_レ歌曰

得保都必等 麻通良佐用比米 都麻胡非尔

比例布利之 utili 於返流夜麻能奈 (万葉集・

卷五・八七五・八七一)

七八は、『述異記』に載る，古代中国の「晋」の王質という樵（きこり）が，山で四人の童子が碁を打つ様に見とれている間に斧の柄が朽ちるほどの長期間が過ぎていたという伝説に拠ったもので，同様の例を挙げる。

院の殿上にて，宮の御方より碁盤いださせたまひけるごいしけのふたに

をののえのくちむしらず君が世のつきんかぎりはうちこころみよ (後撰・慶賀・一三八三・一三八四・命婦いさぎよき子)

七九は、『長恨歌』の「在_レ天願作_二比翼鳥_一，在_レ地願為_二連理枝_一」に拠った表現で，同じく摂取した例を挙げる。

宣耀殿女御にたまはせける

いきての世しにての後ののちの世もはねをかはせる鳥と成りなん (玉葉・恋三・一五五五・一五四七・村上天皇)

八〇は，漢の元帝の宮女だったが，匈奴の皇后となった王昭君の説話に拠る。『俊頼髓脳』『今昔物語集』にあり，『凌雲集』以下の漢詩集，『和漢朗詠集』の題，和歌では『後拾遺集』から見いだされる。

見るたびに鏡の影のつらきかなからざりせばかからましやは (新撰朗詠集・雑下・王昭君・六五九・快円法師)

第二部の和歌内容は，恋人に会えず年月を経る悲しみを詠む和歌を配したものである。つまり，第一部末尾の「会不会恋」を終末として，その確

認の歌々を置いたということだろう。

5. まとめ

本論文では，まず一四人の『個人別久安百首』四季部の内容を『部類本』の歌題を用いて一覧表にし，崇徳院の春部末尾の独自性を指摘した。次に崇徳院の百首で四季部中心に，“和歌の用語と手段”という観点から，三代集的詠法，漢詩句を本にする，古代語の多用，“和歌の方向性（心の在処）”という観点から，日常性（語）・俗世への関心，視覚美，幻想美への嗜好，殺生戒・罪，仏教帰依の要素を指摘した。全般的に和歌史の時代性を反映するが，後半の観点では，連環する崇徳院の心の世界を示すものと考えた。次に恋部は，恋の進行に従った構成に，和漢の知識に拠る恋歌を添えたと指摘した。一般的恋歌から外れた自己中心的な身勝手さや，強引さ，あるいは卑屈さの裏にある孤独などを特徴的とした。恋の進行の末尾が『百人一首』に入った一首だが，「瀬をはやみ」は俊成が『部類本』の編纂時に改訂したとし，『個人別』の「ゆき悩み」こそが恋部を冒頭から辿って至った作者の心の内側にある，恋のみに限定されない生き難さの苦しみを吐露した表現として自然ではないかとした。

本論文で四季部中心に見た上の結論は，崇徳院が意識して求めた美や理想に向かうものであるのに対し，恋部で勅撰集に入れられなかった個性的な歌々について指摘したことは，院の心の深部をさらけ出しているように思う。特に奔放とも言える何首かは刺激的である。それは帝王ぶりの自由さに拠るとも言えるが，それ以上に出生時からの異常性が彼の生き方を決定づけたのではないか。静穏な恋など無縁だったのかもしれない。この百首では，全体でほぼ3首に1首が勅撰集入集歌である。崇徳院にとって本百首は代表作と言えるだろう。同時に勅撰集入集歌以外の部分までもを含めて注目すべきだと思う。

注

- (1) 崇徳院の出生事情については，角田文衛著『椒庭秘抄』（朝日新聞社 1975/1，朝日選書 (281) 1985/6）に詳しい。
- (2) 『和歌文学大辞典』の「崇徳天皇」「久安百首」の項を参照。
- (3) 以下に崇徳院の『久安百首』の勅撰集入集状

況を示す。数字は歌数。

- 春(9) 夏(3) 秋(7) 冬(2) 恋(6)
 釈教(1) 無常(1) 離別(1) 物名(1)
 詞花集(1) 千載集(8) 新古今集(4) 新
 勅撰集(4) 続後撰集(1) 続古今集(2) 新後
 撰集・続千載集(1) 続後拾遺集・新千載集・
 新拾遺集(2) 新後拾遺集・新続古今集(1)
 計31首
- (4) 岡本あつ子「千載集に於ける久安百首歌」『日
 本文芸研究』1981/3
- (5) 佐藤明浩「詠歌の場としての定数歌—『久安
 百首』と歌学—『古今集新古今集の方法』2
 004/10
- (6) 野本瑠実「『久安百首』の羈旅歌」『国語と国
 文学』2009/1
- (7) 佐藤明浩「部類本と『千載和歌集』の配列構
 成」『国文学論考』2011/3
- (8) 竹下豊「『久安百首』における『堀河百首』の
 影響」『言語文化学研究』日本語日本文学編
 2011/3
- (9) 使用本文は、書陵部蔵本(一五五・三六)を
 校訂した『新編国歌大観三』所収本文を用い
 た。表記は適宜改めた。
- (10) 『部類本』の引用には、京都女子大学図書館
 蔵谷山茂旧蔵本を翻刻した『谷山茂著作集2』
 所収本文を用いた。表記は適宜改めた。
- (11) 注(7)に同じ。
- (12) ルビは『部類本』本文。以下同じ。
- (13) 注(5)に同じ。
- (14) 「ユズエフリタテ」古今六帖(三四三〇)・
 細井本・温古堂本、「ユミトリタテ」類聚古
 集・神田本・古葉略類聚鈔、「ユズエフリオ
 シ」大矢本・京都帝国大学本・寛永二十年版
 本、「ユハズフリタテ」和歌童蒙抄(四二〇)
- (15) その到達先には、高野山に存する『国宝阿弥
 陀聖聚来迎図』のような、写実性・夢幻性・
 宗教性を兼ね備えた荘厳・華麗な世界が望ま

れているのかもしれない。

- (16) 『久安百首全釈』380 ページ。『部類本』本
 文の性格については、後述するが、俊成に拠
 る整理があったと考えている。
- (17) 以下に他歌人の『久安百首』恋部での注目歌
 を抜粋する。崇徳院の詠風と一致はしないが、
 非伝統性は認められる。
- 我が恋と君がつらさとくらべむに山にたと
 へばいづれ高けむ(三六五・顕輔)
 いかでさは世に長らへてわびつつはつれな
 き人のはてをだにみん(三六六・顕輔)
 かくばかり厭ふだにこそ恋しけれなど返し
 けむおそのたはれを(三六八・顕輔)
 契りしを命とたのむ我なれば生けも殺しも
 君がまにまに(三七四・顕輔)
 浅からぬ心を文に書きのべて投ぐる折にや
 我をしるらん(五六五・隆季)
 いなどだにかきける筆のなさをば束の間
 にても忘れやはする(五六七・隆季)
 荒熊の棲むといふなる深山にも妹だにある
 と聞かば入りなん(七七〇・実清)
 いかせむ天の逆手をうちかへし恨みても
 猶あかずもあるかな(八七三・俊成)
 逢ふごなき嘆きのつもる苦しさをとへかし
 人の懲りはつるまで(一〇八〇・堀河)
 ひきかへて辛き心やつれなしと我をうらみ
 しむくいなるらん(一一七二・兵衛)
 睦言もまだ有明のつきぬまに鳥の音さして
 帰れとやさは(一三七〇・小大進)
 わがことや厭ひすてたる糸屑の裳裾につ
 きて君をはなれぬ(一三七七・小大進)
 あひみむと激しき山へのぼるかななのめな
 らぬは子を思ふ道(一三七九・小大進)
- (18) 初句は「君だにも」が正しい。「君を…」の
 「を」は、非部類本中の書陵部本二冊と島原
 文庫本、部類本二本で脱。意味からは衍字。

Abstract

First, this paper points out the originality of the ending of the section of spring in “Kyuan Hyakushu” by Sutokuin. Secondly, it explores the characteristic elements of his waka in the section of the four seasons. Those are the following: three elements from the aspect of “terminology and means of waka” and five elements from the aspect of Sutokuin’s concerns in the creation of waka. The latter elements appear to show the world of Sutokuin’s mind, where they interact with each other. Thirdly, it points out that in the section of love Sutokuin added love poems based on the knowledge of waka and kanshi (Chinese poetry) to the composition describing the process of love. In the section of love we can notice selfishness, which is not found in common love poems, aggressiveness and solitude behind servility. This paper also indicates how a waka that depicted the last process of love was revised by Fujiwara Shunzei and included in “Hyakunin Isshu.”

(受付日：2017年3月13日，受理日：2017年3月21日)

柏木 由夫（かしわぎ よしお）

現職：大妻女子大学文学部日本文学科教授

東京教育大学大学院日本文学専攻修士課程修了。

専門は平安時代和歌文学。現在は平安時代中・後期の和歌文学に関する研究を行っている。

主な著書：平安時代後期和歌論（単著，風間書房）